小高区天野家住宅の諸建築に関する調査報告概要

文責：狩野勝重

明治三十七年 1907 に東部鐵道からの失火により全焼した天野邸は、明治四十一年 1908 秋から再建計画に着手[註1)]し、明治四十二年 1909 九月、財團法人工学院を第 35 回生として卒業[註2)]して間もない二本松孝蔵[註3)]の設計のもとに、約定を交わし土台に用いる榧材の搬入[註4)]から工事に着手[註5)]している。工事の元請は松田教蔵、大工棟梁は西竹八であった。

当初の再建計画では、主屋のほかに隠居所一棟、別棟風呂場および厠、土蔵三棟、厩一棟、物置一棟、さらに三つの井戸と北西山裾の溜池が、石垣に囲まれた敷地一杯に展開される予定であったと推測[註6)]される。

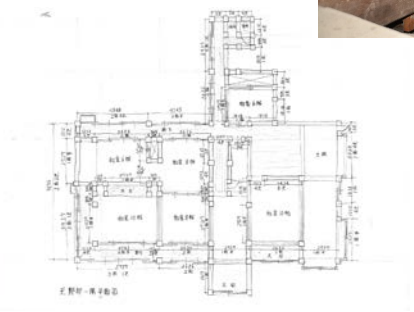
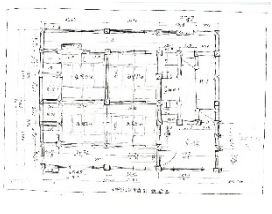
主屋の上棟は明治四十四年 1911 十二月、その後二年の歳月をかけて大正二年 1913 十二月に竣工の運びとなるが、便所・炊事場・風呂場・厩工事に若干の日月を費やしている。この工事で使用された石材は秋保石材から搬入されているが、これは天野定八が秋保軽便鉄道に関与していた時期がある[註7)]ことからの縁であったものと推測される。

主屋完成後、西土蔵の修復、東土蔵の建設が大正十五年に完了するが、西土蔵の設計者は紺野清五郎で修復したのは紺野清介[ママ]、東土蔵設計者は左官棟梁紺野清輔であった。東土蔵完成期にあって全体計画の中で再建されたのは、当初計画とは多少異なり、主屋とその北に延びる六畳座敷および便所棟（屋根葺き替え工事の時に増築された可能性もある）、西土蔵、東土蔵、さらに、東物置と厩および厩二階の隠居所[註8)]、外部厠、井戸などであった。

また、昭和二年 1927 には京都の西彦製瓦株式会社に依頼して屋根瓦を葺き替えている。

天野家住宅主屋

主屋の建築規模は、一階床面積は 54.427 坪、二階床面積で 29.227 坪、延床面積 86.684 坪。使用部材を見ると、布石は秋保石、土台は榧、柱は主としてアスナロ、階段部分は杉丸太で、非常に目の細かい年輪材を使用した、上質の仕上がりを見せている。小屋組みは松の挽き立て材使用。

外観は純粋な和風建築であるが、二階階段上の書斎は洋風格天井であり小屋組みに台形トラスを用いるなど、洋風の要素も採り入れられている。また、軒先は船枻造りとするなど、近代和風建築の範疇に入れられるべき建築物である。二階の座敷は、四ッ間取の中央柱が取り外せるように工夫され、柱を取り外せば二十八畳の大広間が出現する。

大工棟梁を務めた西竹八は「大工達の水戸から小高町までの運賃の支給請求と、建築界において評判のある大工にて、一日の給与を八十銭にして頂きたい」[註9)]という要請があったほど腕の良い棟梁であったという。その評判は確かなものであったと推測される。平成二十三年三月十一日を皮切りに東北地方を襲った東北地方太平洋沖地震にあっても、大きな構造的損傷は皆無に近い。現状では平成 23 年 3 月 11 日の東北地方太平洋沖地震後立ち入りが不可能になったことから、保善修理が長期に亘ってなされなかったことによる雨漏り被害を前提とした損窮情況は可也進行しているものの、今この時点で修復にかかれば、現在自重で沈み込みが見られる身舎部分全体の僅かな嵩上程度で当初の状態に修復することが可能である。

注目すべき手法として、小屋組みに導入された台形トラスの存在がある。設計者二本松孝蔵の発案か大工棟梁西竹八の発案かは明らかではないが、大工棟梁が勝手に木割内容を変更することは考え難いことから、設計者合意の上であったと考えて間違いない。いずれにせよ、明治末期に一般的和風住宅において、その計画を設計者に委ねるという発想が稀有の事であり、発注を受けた設計者が後に国粋建築、特に神社建築設計の第一人者となり、その初仕事に近い内容が備つぶさに知られる重要な作品として、決して蔑ないがしろにされるべき作品ではない。その建設関係資料ともども末永く保存されることを期待する。

註１）『二百分一ノ図　明治四十一年仲秋　中教正　石島徳長　家相図』

註２）『工學院卒業生名簿　自第一回　至第九十九回』昭和十四年五月。工学院の前身である工手学校の卒業である。

註３）『工学院大学第 77 号　交友会報』昭和 47 年 12 月所収「二本松孝蔵氏を悼む」中沢甚平
二本松孝蔵は福島県伊達市の生まれと伝える。しかし、社団法人栃木県建築士会『40 周年記念誌』で中沢甚平は「本籍は福島県相馬郡小高町岡田字天神前」で、「二本松という名前も、福島県の二本松藩の家老の家の出だったと聞いている」と語っているが、二本松藩の家臣録には「二本松」姓存在せず、また、二本松の家系は二本松藩と敵対する関係にあった事から、奥州探題であった畠山家の系統でなければ不自然である。生誕地と本籍地は必ずしも一致するものではないので、中沢甚平の話をどちらかに特定することはできない。

註４）『明治四十四年　西竹八　覚留』による。

註５）明治四十三年四月二十四日『北野商店仮送』には材木送付の内容が記されている。
『記　明治四十二年旧七月十三日』では「唐鉋ノ先掛大小二丁」、「鉋ノ先掛壱丁」、「チョウナ先掛壱丁」等々の道具の直しや注文記録が見えて、工事が進行状況を類推させる。
『明治四十二年旧九月十一日　約定』に「カヤ土臺弐拾丁」とあり、『明治四二年十二月十五日出発届　鈴木勝之助』に「栢材長柱三尺六七角二本・・・」とする警察署御申が存在することから、既に計画が先行していたものと考えられる。

註６）前掲の『家相図』による。

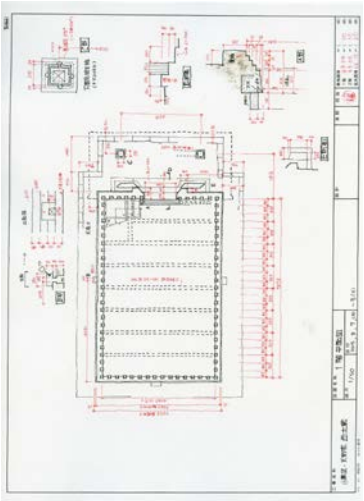
註７）『二ッ澤軽便軌道線路平面圖　二千分ノ一』が保存されている。

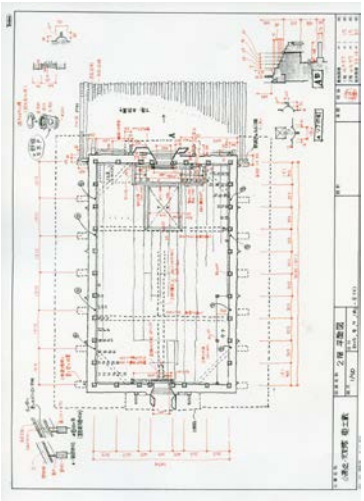
註８）昭和二年、天野邸の再建工事が完了した記念写真には西土蔵、東土蔵、さらに、東物置と厩および厩二階の隠居所、敷地北西奥の四阿、味噌醸造の煙突などが写っている。建築には積極的にトラスが採用されていた。このことから類推するに、現在のコンクリート塀も昭和二年には完成していたことになる。

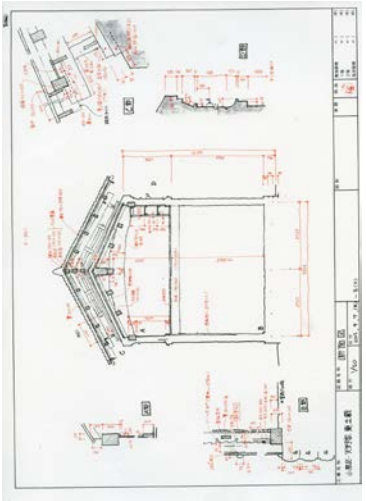
西土蔵

西土蔵は、明治三十七年1907に東部鐵道からの失火では全焼を免れたものと推測される。当初の土蔵設計者は左官棟梁紺野清五郎で、大正十五年に修復したのは紺野清介ママと記録されている。清介は後に清輔と改名しているが、清五郎の息子と考えられる。施主は天野定八の母親であるイネ氏である。東土蔵と共に腰から下を海鼠壁とした土蔵の佇まいは、福島県内の数ある土蔵の中でも特筆すべき存在である。一階の内壁は板張りである。

建築規模は、一階床面積、二階床面積ともに9.978坪で、延床面積19.956坪。壁厚一尺一寸五分を数えている。

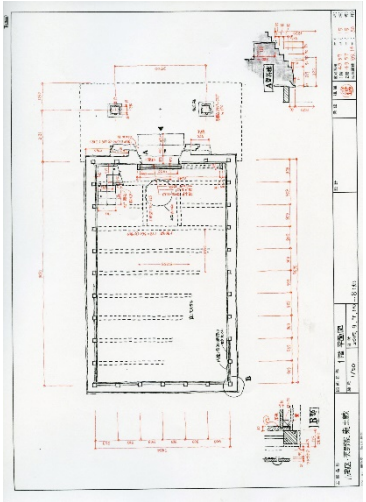


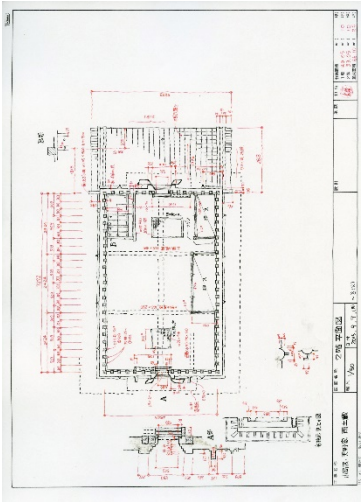


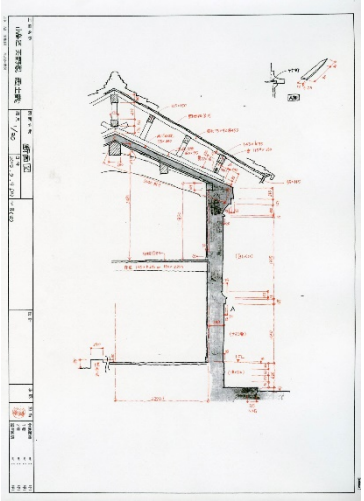


東土蔵

施主は天野定八、設計者は紺野清輔と記録される東土蔵は西土蔵にもまして豪華さは際立っている。東土蔵の特徴的な部分は巨大な小屋梁と妻に用いられたキングポスト・トラス





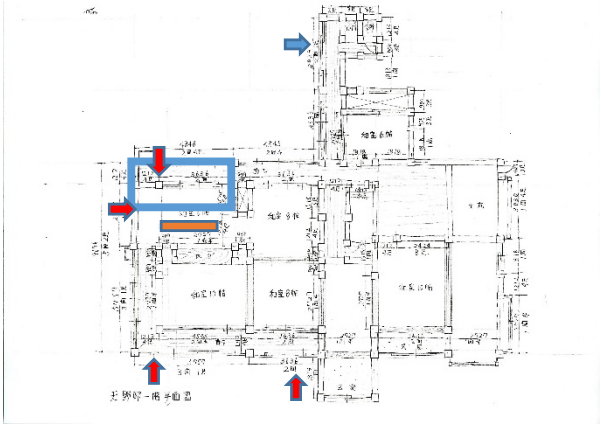


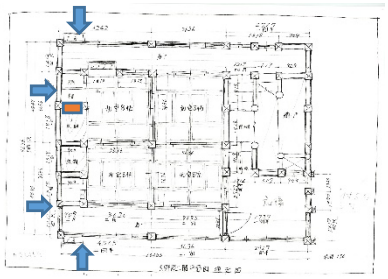
であるが、外観には表れてこない。内装は一階・二階ともに板張りとし、ペンキ塗装がなされている。

建築規模は西土蔵を忠実に写したもので、一階床面積、二階床面積ともに 9.978 坪で、延床面積 19.956 坪であるが、壁厚は若干薄めの一尺である。

天野家住宅の評価と現況損傷程度

平成 23 年 3 月 11 日の東北地方太平洋沖地震による天野家住宅主屋における直接被害は、僅かに一階座敷床の間の壁、および、二階奥の間の床の間脇壁に構造的剪断亀裂が生じている





⬆は地震による被害　　**⬆はその後の雨漏りによる被害**

るのに加えて、外壁部分では庇の防水、雨除けでつけられた保護板ならびに雨戸の羽目板が外れた程度で、軽微な損傷にとどまっているが、この地区が立ち入り禁止区域に指定された三年間の間に一階奥の間の「女中部屋」は樋から溢れ出た雨水によって構造材に迄及ぶ腐食が進んでいる。

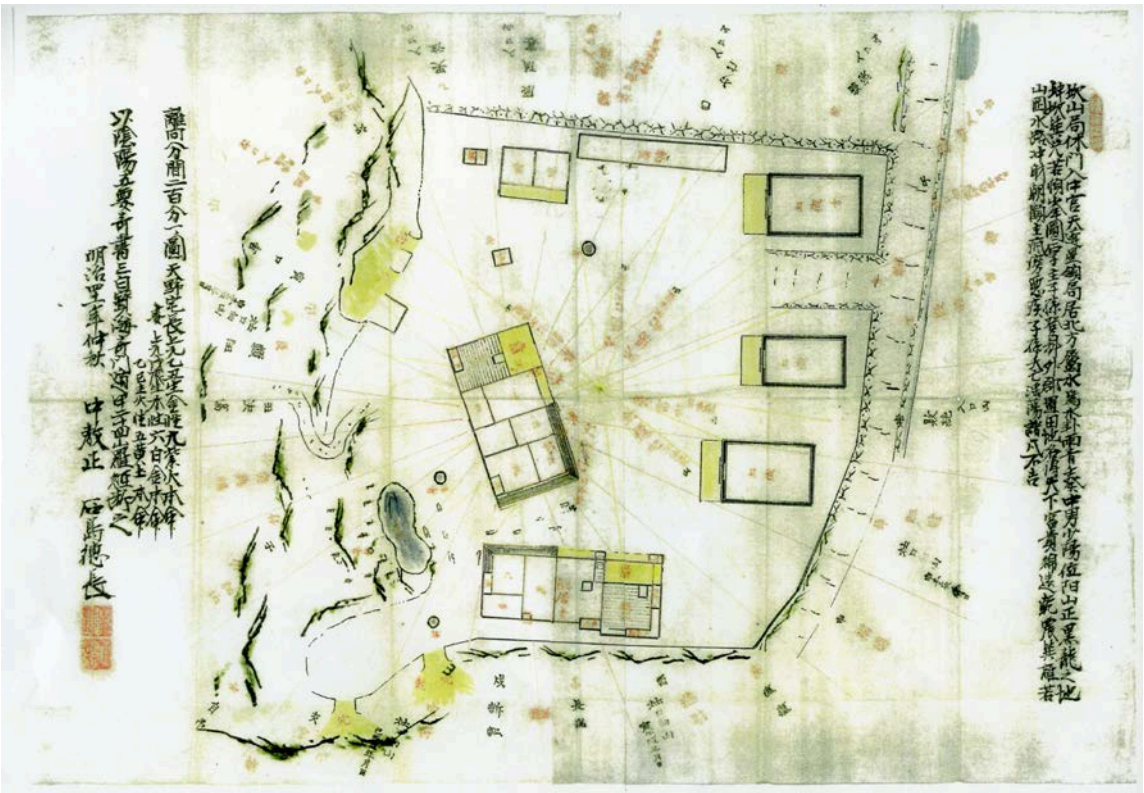
また、西土蔵、東土蔵においても、構造的には全く問題がないにも関わらず、東北地方太平洋沖地震直後に生じた僅かな壁の亀裂が、現在ではその罅割れが大きく拡大してしまっている。

天野家全体は、近代における社会的中心をなす大地主で、常磐線と名称を変えた東部鐵道の桃内駅までも自らの敷地内に造り、建築資材の搬入に用いたと伝えている。天野定八はイタリア音楽の研究家として知られる天野秀延の父親に当たり、地域における近代文化の担い手でもあった。主屋、西土蔵、東土蔵とも、周辺地域のシンボルとして位置付けることのできる優れた建築物であると位置付けられよう。今回、偶然にも比較的詳細な調査が可能になったが、東北地方太平洋沖地震の後、修復作業がままならなかった現在、多少損傷が進んでいるが、可能であれば、早期保全修復作業を行い関連資料と共に保管をすることで、地域の歴史的伝承者となし得ることを希望する次第である。

本調査は、昭和 60 年に狩野および当時の学生によって為された調査の追跡調査として平成 27 年 9 月 7 日・8 日に当主の依頼により行われたもので、「伝統的建築文化推進協議会」会員の渡邉義孝、狩野勝重の二名が担当し、別途『天野家住宅損傷情況調査報告』は狩野が担当した。掲載した実測調査図は渡邉義孝による。

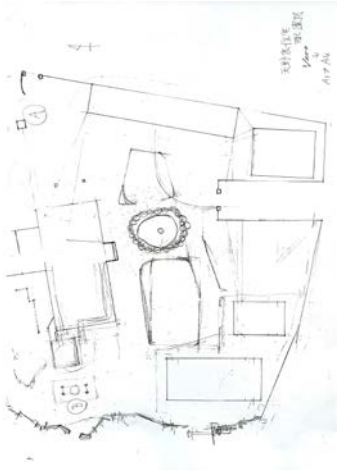
なお、天野家住宅主屋の設計者である二本松孝蔵については、棚倉町の八槻家神官住宅調査出発見された棚倉町八槻家土蔵工事設計（『昭和八年四月二十一日本殿磚ﾏﾏ座祭執行札』に記載のある「工事設計　二本松孝蔵」墨書）日本大学工学部の速水清孝教授の調査で、日光山諸建築の昭和の大修理に携わり、昭和 31 年度から 32 年度に栃木県建築士会の第三代会長を務めた人物であったことなど、いま少し詳細が判明してきたので、近いうちに日本建築学会に速水清孝教授を中心とした研究報告がなされる予定である。

明治四十一年『家相図』



明治三十七年 1907 に東部鐵道からの失火によって全焼する以前の天野家諸建築物の概要を推察し得る史料であろう。現況と比較してみると、土蔵の位置、隠居所の位置に変更が加えられていることが判る。

この後、主屋の設計に着手したものと推定されるが、残念なことに、明治四十二年九月に榧土台材料調達を始めるまでの経過について明確にし得る史料は見つかっていない。



現況配置図